2005年6月6日

セミナー通信　Ｖｏｌ．１３４　西村セミナールーム

主宰　西村　和彦

赤点にはならないのか？

１学期の中間テストが終了しました。各中学・各学年の得点分布表を眺めていて、最近気になることがあります。新指導要領・絶対評価になり、どの中学の科目も基本的には「簡単な」問題になっていますが、にもかかわらず極端に低い得点の生徒が以前にくらべて増えています。

俗に「学年平均点の半分以下だと『赤点』といって、追試や補習などを受けないと単位がもらえず『留年』になることもある」はずだったように思います。高校や大学ではこうしたケースで単位が取れないことは今でもよくありますが、小中学校の場合は、出席日数が足りないこと以外の『留年』というのはあまり聞いたことがありません。

ちなみに今回のテスト結果（高森台中学）だけでどのくらいの生徒が『赤点』の対象となるかを概算してみました。

赤点対象%	英　語	数　学	国　語	社　会	理　科
中　1	9.7%	9.0	5.5	8.3	13.1
中　2	20.5	25.4	12.7	22.2	10.9
中　3	27.1	13.1	20.7	13.7	14.0

中２の数学や中３の英語は４名に１名がいわゆる『赤点』対象になります。

今回が全く初めての定期テストであった中１は、他の学年に比べるとほとんどの科目が10%以下でした。これは中学に進学した緊張感からきているものだと思います。実は今年の中３も２年前（1年中間テスト結果）には、英語6.6%、数学6.4%程度でしたので、同時期の比較としては、今年の中１のほうが平均的には「悪い」ともいえます。もちろんテスト内容の違いもあり決めつけることはできませんが、今後気をつける必要があると思います。

さて、これほどの多くの『赤点』対象者がでる原因は何でしょう。もちろんテストに臨む「生徒の自覚」の問題が一番だと私は思います。ただ、教師の指導法や単位認定制度・保護者の意識などにも重大な問題があるようにも思います。小中学校も通知表を絶対評価制度にしたわけですから、せめて高校や大学並みの厳密な単位認定制度を適用するべきではないかと思います。悪平等意識がはびこっている日本の場合、「小中学生を留年させるなんてかわいそうだ」という声が聞こえてきそうですが、学業における単位に「情け」を求める意識がこの国の学力崩壊の根底に横たわっているのではないかと思います。

例年高森台の塾生の平均点をお知らせしていましたが、人数の少ない学年が多くなってきましたので、データを出すことは控えさせていただきます。